



■ フォトエッセイ ■

天空の町 九份

Chieufen

写真・文 坂倉 恒
Hisashi Sakakura

台北の中心街・忠孝復興站前の大通り沿いにあるバス停から瑞芳火車站行き市バスを乗り継ぎ、九份へと向かう。所用一時間半。値段は九一元(約二七〇円)。台北の喧騒を離れのどかな景色が続く山間の道を登ってゆく。そこは突然開けた空間。天空の城のように山に沿って家々が見える。九份はかつて金坑で栄え、日本統治時代に最も隆盛を極め、金の枯渇とともに衰退していった。だから当時の面影が手つかずに残っている。九份の由来は、「開墾した土地の持ち分を九人で分けた」「清代に九世帯しかなく何か買う際『九つ分ください』と注文した」などの説がある。

九份に向かうバスからの車窓。ここからさらに山道を登り、九份へと辿り着く。温泉郷のような雰囲気





九份のもっとも有名な階段・豎崎路の景色



早朝、九份の階段を散歩する老人。豎崎路で声をかけたら気さくにポーズを取ってくれた



崙頂路にある聖明宮で早朝から祈禱する女性

一九世紀末に金が発見され、ゴールドラッシュで賑わい人口が増えた。日本統治時代には日本家屋のような家並みが形成され栄華を誇る。一九七〇年頃に金が枯渇し人々が村から去り、九份は記憶に遺された村のようになった。一九八九年にはこの村を舞台にした映画『悲情城市』（一九八九年侯孝賢監督）が公開され大ヒット。台北にはないノスタルジックな雰囲気がある台湾人を惹き付けブームとなる。村は再び活況を取り戻し、土産物屋からデザート茶屋・酒家が増え台北から日帰り観光地として現在も観光客で賑わっている。映画『千と千尋の神隠し』（二〇〇一年 宮崎駿監督）のモデルの村だという話が広がり、ガイドブックで詳細に紹介され日本からの観光客も増えた。

早朝九時に到着。まだ閑散としている。目前の展望台から景色を楽しむ。台北から見て北東の位置にあり、海に囲まれ景色がとても綺麗だ。辺りでは作業員が掃除を始め、アーケード街の茶屋が仕込みを始める。タロイモを蒸して潰し白玉粉と混ぜた団子の台湾独特のデザートを芋圓と言ひ、九份にはこの芋圓を売るお店がたくさん軒を連ねている。テラスからの眺望が目玉となっている。観光客は見えずどの店も眠たげだ。写真を撮っていると笑顔で応じてくれる。九份でもっとも有名な階段・豎崎路を登ってゆく。情緒溢れる佇まいで幻想的だ。映画ロケ地の看板を出している店が多い。妖怪が出てきそうな風情を感じる。豎崎路の階段を登り切った先に小学校があり、ここからの見晴らしがまた絶景。ひとつ向こうの山には台湾独特の墓が群れをなしている。小さな家のような祠。台湾では家ごとではなく個々人の墓があり清明節には全ての墓を巡ってお参りする。儒教の国で祖先を大切にしているのがありありと感じられる。明聖宮では朝の祈禱が始



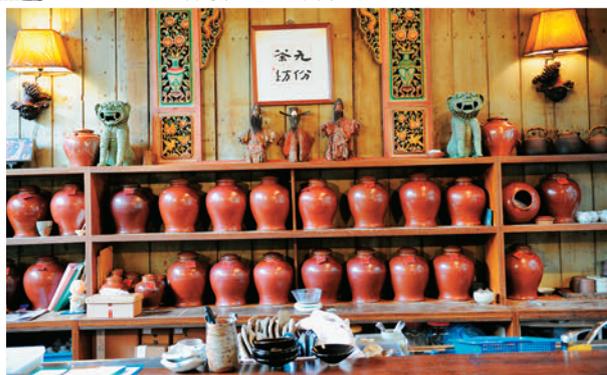
まった。台湾の民族衣装を着た女性が長い線香に火を灯し、祈りを捧げている。村が少しずつ活動を始める。村の息吹を感じる。

九份をロケ地とした映画『悲情城市』は二・二八事件を扱った映画である。この映画の直前まで、二・二八事件について話すことは禁じられていた。一九八八年に本省人である李登輝が総統に就任したことで緩和された。一九九五年日本による台湾併合以来五〇年もの間日本の統治にあった台湾には、日本語教育を始め様々な日本の技術・文化が導入された。一九四五年に日本が敗れ再び大陸（中国）が統治を始める。日本統治時代の後、外省人が台湾へとやってきて光復（解放）してくれたのも束の間、外省人による搾取が始まる。やってきた軍隊の装備や佇まいを見てがっかりした本省人が多かったという。外省人は台湾の人々を「日本に植民地意識を植え付けられた奴隷根性の連中だ」と言い、やりたい放題の限りを尽くす。外省人は台湾人が持っていた権益を占有・搾取してしまう。やがて台湾人のあいだに不満がくすぶってゆき、一九四七年二月二七日闇煙草を売っていた女性を暴行し、金も煙草も全て押収する外省人のやり方に、周りにいた台湾人が怒り外省人に詰め寄る。恐怖を感じた外省人が全く無関係の台湾人を撃ち殺してしまう。翌二八日、外省人への怒りや不満が爆発。本省人の怒りが台湾全土に広がった後、「台湾人の反乱」という手紙を陳儀から受け取った蒋介石は台湾へ派兵する。そこから情勢は反転。外省人による知識階級の虐殺は二万八〇〇〇を数える。この凄まじい虐

豎崎路の階段を見下ろす。夜になれば提灯が道案内してくれる。ゴールドラッシュの夢の欠片を思い出すかのように。



この辺りには茶屋が建ち並んでいて中でも有名なお茶の店「九份茶房」。日本語でお茶の煎れ方を教えてくれる。テラス席から素晴らしい景色を眺めながら飲む台湾茶はとても美味しい





タロイモを蒸して潰し、白玉粉と混ぜた団子を芋圓と言うそうです。台湾のデザート。仕込みをする男性とお店

殺の歴史をその後四〇年間、引き摺ってきた。

九份は一見すると歴史とは無関係に思える。記憶からも取り残されたのどかな村に見える。街並みは日本の江ノ島を思い起こさせ、山沿いに観光客相手の土産物屋や茶屋が連なり情緒を醸し出す。目前の海の景色には烏帽子岩そっくりの島が見える。観光客相手に生計を立てている所もそっくりだ。二〇〇八年からは無線LANサービスが開始され、台北並みにネット環境も進んでいる。

一〇〇年前の建物を活かした九份茶房に入りお茶を頂く。テラスからの景色がいい。ゴールドラッシュで湧いた当時の面影を感じさせる。従業員のお姉さんが日本語でお茶の煎れ方を教えながら実演してくれる。「茶器を温め一杯目は一〇〇度、その後は八〇度で煎れる」。小さな火鉢と鉄のやかんに趣がある。茶文化の奥深さを感じさせる。観光客がひっきりなしにお茶を飲みにやってくる。台北や東京の喧騒を離れ山里でのんびりとお茶を嗜むと、都会での様々なストレスが癒されてゆく。眼を閉じると二〇〇年に渡る九份の歴史が浮かんでくる。ここを舞台にして描かれた映画『悲情城市』の役者たちがリアリティを伴って動き出す。

九份で台湾の人々を観察する。台湾の人々はただノスタルジーに浸るために来てるわけではなさそうだ。忘れてはいけない過去の歴史を受け容れ引き継ぐために訪れている。一七世紀初め大航海時代にオランダなどによって領有された台湾。アジア貿易の重要な拠点として独自の発展を遂げた。台湾の歴史は大国に翻弄されながらもずっと繋がっている。人間の営みが歴史となるのだ。そこには言葉では表せられないものが存在し、人々はその荷物を背負い懸命に生きている。そこには日本や中国、オランダの香りが漂いながらも独特の命を吹き込み、二一世紀を乗り越えようという人々の思いが伝わってくる。

基山街の外れにある小さな寺院



さくら ひさし/写真家

1971年名古屋生まれ。PAPERSKY写真プロジェクト「Japan Mindscape一心のなかで生き続ける風景」(<http://www.papersky.jp/tag/japan-mindscape/>)に参加。主な写真展に『古巴肖像』(ニコミカミノルタプラザ)、『ヤングポートフォリオ展』(清里フォトアートミュージアム)、『ペナレス行きのスロウ・ポート』(新宿・大阪ニコソロン)など。<http://breathnoir.velvet.jp/>